僕は邦楽部

中　二

「男子一人だけで、寂しくない？」

ある日、僕は突然、友達から声をかけられた。

「えっ、何のこと？」と最初は思ったが、すぐに「あのこと」だと分かった。

僕は邦楽部。邦楽部なんて聞いたこともないし、何をするのかも分からないと言う人もいるかもしれないが、僕は毎日、畳の上で正座をし、箏の練習に励んでいる。部活動見学では、吹奏楽部やバドミントン部などにも見学に行ったが、あるとき、校舎の窓から流れてきた「きれいな音色」にひかれて行ってみると、そこには『土人形』という楽曲を演奏している邦楽部の先輩たちの姿があった。そのとき、僕は迷わず邦楽部に入ることを決めた。

邦楽部は、先輩も同級生も、全員が女子部員だ。つまり、男子は僕だけだ。姉が二人いて、幼い頃からピアノを習っていた僕にとっては、女子部員しかいないことや、箏を弾くことは全く気にならなかったが、友達は違うらしい。そこで、あの質問となるわけだ。そして、先生たちまでも、

「男子一人で、大丈夫？」

と声をかけてくる。周りが気にしているのは「女子」の中に「男子」が一人いるということ。僕はそのことについて、ある疑問をもっている。

男子と女子は別々に活動するのが当たり前で、大勢の中に、他の「性」が一人でいると、「差別」というのではないが、特別視する人がいるのはなぜだろう。去年の音楽会で、僕はクラス合唱の伴奏をした。全クラスの伴奏者の中で、男子は僕だけだった。音楽会を終えて、僕にかけられた言葉はやはり、

「男子なのにすごいね。」

だった。この言葉の裏側には、「普通は女子の方が上手なはずなのに」という考え方があるように思える。ピアノの演奏に性別が必要であるとは思えない。男性でも、非常に繊細なタッチで演奏する人もいれば、女性でも力強く、ダイナミックな演奏をする人もいる。要はその人の弾き方の個性であり、性別による特性など問題外であると思う。「男だから」「女だから」こうあるべきと、決めつけられることに違和感を覚える人は、僕以外にもいるはずだ。

先日、「性の多様性」への配慮を目的とした「ジェンダーレス制服」を取り入れている学校が増えているというニュースを見た。「ジェンダーレス」とは、男女差別のない考えのことだ。こうした対応が増えてきたのは、きっと「性」に対しての自分の考えを、多くの人が発信してきたからだろう。「男子は男子らしく」「女子は女子らしく」……。制服と同様に、僕たちは分けられてきた。だから、女子の中に男子が一人でいることを心配されたり、からかわれたりするのだ。箏は女子が弾くものだという先入観や固定観念、他の「性」の中に一人でいることへの偏見が、そこには見てとれる。箏の歴史を調べてみると、「奈良時代に中国の唐から伝えられ、当時の都を中心に、天皇や貴族の間で楽しまれるようになった」とある。そこで活躍していたのは男性であり、実際、当時の優れた演奏家や作曲家の多くは男性であったらしい。現在の箏のように、女性中心のものでは決してないのだ。

そもそも、人を性別で判断する必要はどこにもないと思う。これまでも、「性」への違和感や悩みについて声をあげてきた人はいたはずである。しかし、少数派であったためにその声はなかなか届かず、周囲や社会に理解されないまま、差別的な扱いを受け続けてきた。僕が今こそ変えていきたい。社会にも少しずつ、その風潮が現れてきている。偏見のないフラットな社会を僕たちの手で創れたら、どんなにいいだろう。制度やきまりが変わったからといって、人間のもつ先入観や偏見がすぐになくなるわけではない。だが、この問題が「問題」でなくなるように、僕たち一人一人が考えて行動していけば、いつかその日が来ると信じたい。

メディアで頻繁に使われている「配慮」や「ジェンダー」「性の多様性」といった言葉が、意識することなく、自然と僕たちの生活の中に溶け込むようになったらいいと思う。人は一人では生きていけない。他人と関わり助け合い、支え合う中で、「男であること」や「女であること」といった線引きをせずに、ただ「人」として生きていける世の中であってほしい。僕らが創る未来に、壁なんかいらないのだ。

つい先日、新入生の部活動見学があった。あれから一年がたったが、もう僕のことを「男子なの

に……」といった目で見る人はいなくなったように思う。男子の新入生も何人か見に来てくれた。残念ながら入部したのは全員女子だったが、体験で男子に教えることができてうれしかった。

今日も僕は箏を弾く。これまでのように、これからも。邦楽部、最高！